



浅間山

せんげんやま

手を握り返す

生徒指導主事 梅田 佳宏

「おむすびの日」というものが存在するようです。1月17日です。28年前の1月17日に阪神・淡路大震災がありました。震災後、炊き出しのボランティアの人々が、被災した人々をおにぎりで元気づけようとしたことから制定されたそうです。それを知り、不意に脳裏に浮かんだのは、28年前の阪神・淡路大震災が起きた朝のことでした。

私は当時小学5年生でした。今でも覚えているのは、当時の担任の先生が、朝の話で震災のことを話題にしていたことです。「高速道路が崩れたり、各地で火の手が上がったりする中、現地の人々はどんな思いでいるのだろう。また、そんな中、ボランティアで人々を支えようと駆け付ける人がいる。」

同じような体験をしていないと、共感的に理解することは難しい。そんな捉えていた当時の自分からすれば、相手が見えず、実際にどんな大変さがあるのかも分からないことを心配する先生の話は、正直よく理解できませんでした。しかし、その話をきっかけに、ニュースを見るようになりました。報道されていることをみると、どんどん重い気持ちになっていきました。現地の人々は予期せぬ災害に苦しい生活を余儀なくされ、大切な人を失った悲しみに打ちひしがれる人もいたはず。当たり前だと思っていたことが一気に崩れ去ってしまう辛さといったら……言葉が出なくなりました。

今、振り返ってみると、当時の担任の先生の話から、「思いを馳せる」という考え方を学んだように感じます。自分が教えられる立場から、教える立場になったときに、28年前のことをどのように生徒に語るか、一人の人として何か語れないかと、自分の稚拙な経験を振り返ってみました。思い出されたのは、一緒に苦しいことを乗り越えた教え子たち、自分が苦しいときに、思いを受け止め、支え励ましてくれた友や同僚の先生たちの顔でした。いろいろな関わりの中で、自分の苦しさに気付いて声をかけてくれた人がいました。一緒に頭を悩ませ、考えてくれた人がいました。可能性を示し、背中を押してくれた人がいました。窮地に支えてもらった経験が、自分にはたくさんあったことを改めて痛感しました。

「窮地にいる人が勇気をもてるのは、窮地に温かく手を差し伸べてくれた誰かがいるから。」

そう思ったとき、28年前に担任の先生が話してくれた話は、窮地に手を差し伸べられる人になってほしいという願いの表れだったのかもしれない。「おむすびの日」が制定されたのも、窮地に手を差し伸べられる温かさを大事にしていこうという人々の思いやり、心と心をむすびたいという思いの表れなのではないでしょうか。

本校には、仲間が困っているとき、いつもと違うと気付いたとき、手を差し伸べることができる生徒や先生がたくさんいます。「どうしたの?」「今日元気くない?」と声をかける姿、黙ってそばにいる姿、「一緒に行こうぜ」と共に活動することで元気づけようとする姿など、思いやる姿は様々です。仲間の思いを受け止める寛容さ、共に頑張ろうとする協働性、まさに、学校の教育目標である「共生力」の高まりであると言えます。

その一方で、優しすぎて気を遣いすぎていないか心配になることがあります。「忙しそうだから…」「自分が入ると邪魔してしまわないかな…」「心配をかけたくないから…」相手を大事に思うあまり、自分の思いが後回しになってしまい、苦しくなることはありませんか。

手を差し伸べられたとき、「ありがとう」と言って手を握り返せばいいのではないのでしょうか。甘えることも大事なことです。どうしても相手に「申し訳ない」と思うならば、その分、次の機会に手を差し伸べられるようにすればいいのです。どれだけ手を差し伸べられても、握り返さなければ握手は成り立ちません。手を差し伸べることはもちろん、差し伸べられた手を握り返し、共に高まろうとできることが、心をむすぶことであり、これから求めていくべき「共生力」であると考えます。